

中央中学校
令和元年度
学校通信

ひら

いま拓く

桐生市立中央中学校
令和元年 7月 8日
NO. 9 文責：寺島

「つながりの大切さ」伝わってきました

—桐生市中学校弁論大会—

校内弁論大会で最優秀賞に選ばれた高堂花恋さん（3年2組）が、7月4日（木）、桐生市立中央公民館で行われた桐生市中学校弁論大会に出場しました。結果は優秀賞。わずかな差で少年の主張東毛地区大会への出場はかないませんでした。高堂さんの弁論は、校内弁論大会のときよりも数段レベルアップしていました。全く原稿を見ず、時折笑顔を変えながら、表情豊かに思いを論じることで、聴衆の心の深いところまで届く弁論を行っていたのです。学期末の忙しい中、弁論と真っ直ぐに向き合い、猛練習を行った努力の成果と言えるでしょう。中央中の代表として頑張ってくれた高堂さんに、全校生徒、全職員が惜しみない拍手を送ります。お疲れ様でした。素晴らしい弁論でした。

また、激しい雨の中、応援に参加してくれた校内弁論大会出場のみなさんも各学校代表の弁論を真剣に聞いてくれました。きっと1年生、2年生がこの経験を来年度に生かしてくれることでしょう。また、Kさん（3年1組）とMさん（3年3組）は、大会の最初から最後まで集計表の受け渡しのお手伝いをしてくれました。これも中央中の誇りです。Kさん、Mさんをはじめとする応援のみなさんもお疲れ様でした。

弁論の内容を公表することに高堂さんが同意してくれましたので、以下、原稿から転記していきます。誤字等があった場合は転記者（寺島）の責任ですのでご承知おきください。（その場合、次号で訂正いたします）



▲心を込めて語る高堂さん

「つながりの中で生きる」

桐生市立中央中学校 高堂 花恋

人は一人では生きていけないとよく言いますが、それは人と関わらずに生きていくことはできないということだと思います。どんなときでもそばにいてくれる、お父さんやお母さん。悩みを聞いてくれる優しい友人。私たちは日々、人との関わりの中で生きています。その関わりの中で大切なのは、心と心をつながり。自分とは身近な人ほど忘れがちなものですよね。

「かれんちゃん、よくきたねえ。」

私がお会いに行くと、いつもそう言って、優しい笑顔で出迎えてくれていた曾祖母。そんな曾祖母は、大正8年4月20日生まれ。今年で100歳を迎えました。曾祖母は私が幼いころ、よく一緒にお絵かきやおままごとをして遊んでくれたのを覚えています。

90歳を過ぎてから、思うように体を動かさなくなった曾祖母は、施設に入ることになりました。しかし、曾祖母の衰えは、体力だけに留まらず、日常の簡単なことでさえ困難になってしまい、私は曾祖母に会うことを日に日に拒むようになっていました。

昨年会いに行ったとき、曾祖母の記憶の中に、私の存在はありませんでした。私は忘れられていたのです。

それからおよそ半年が経ち、今年の4月20日。曾祖母の100歳の誕生日になりました。曾祖母も、施設から祖母の家に帰り、いよいよ誕生日パーティーの始まりです。おおきなケーキに花束、模造紙に書かれた「100歳おめでとう」の文字。それらはみな、曾祖母を祝福しているものでしたが、半年前の曾祖母の姿を思い出した私は素直に祝福できずにいました。それどころか、「自分が100歳だということも理解していないはずなのに、お祝いして何の意味があるのだろうか。」とさえ思ってしまった。やがてロウソクに火が灯り、集まった親戚みんなでバースデーソングを歌いました。私もそのときばかりは親戚と同様に、あたたかく、そして心から祝福する気持ちで歌いました。

その瞬間、私は自分の目を疑いました。曾祖母が、涙を流していたのです。言葉こそ発していませんでしたが、曾祖母の涙は100歳分の苦労や喜びがたまっているかのような涙でした。私は、胸が張り裂けるような後悔と同時に、心の底から喜びがこみあげてきました。今思えば、この先一生忘れることのできない出来事です。

なぜ、曾祖母は涙を流したのでしょうか。きっと私たちが心から祝福する心と曾祖母の心がつながったからです。私は、そんなあたたかい心と心のつながりの中に生きる幸せを感じました。

情報化社会で、インターネットやスマートフォンが広く普及し、形だけの優しさや思いやりになりがちな今の社会。しかし今、本当に必要なのは、そんな形だけのつながりではなく、直接面と向かって関わることによって生じるあたたかな心と心のつながりではないでしょうか。

朝起きたとき、家族に「おはよう」と言う。そんな言葉のつながり。友人と笑顔で笑い合う。そんな表情のつながり。毎日一緒に部活をしている仲間と励まし合う。そんな心のつながり。

このような、あたたかいつながりの中でたくさんの愛に包まれて生きていることがどれだけ幸せなことか。大切な人と重なり、つながり合うことがどれだけ自分の喜びになっていることか。そして、私が今幸せに生きていることが、きっと私とつながる人の喜びになっているのです。

だから私は、来年も再来年も、曾祖母の誕生日には、心からの「おめでとう」を言います。

「おばあちゃん、100歳のお誕生日おめでとう」

(ご清聴ありがとうございました)

※なお、文中の曾祖母小柏（おがしわ）ミサオ様は、6月29日に永眠なさいました。

謹んで御冥福をお祈り申し上げます。また、その悲しみを乗り越えて一生懸命弁論を発表してくれた高堂さんに改めて敬意を表したいと思います。